

黄

くがに

金

再文

発化

見

文化庁委託事業 令和3年度戦略的芸術文化創造推進事業



公益社団法人 Association of JAPANESE THEATRE COMPANIES
日本劇団協議会



目次

CONTENTS



P2 事業計画

P3 事業の趣旨・目的

P4 講師紹介

P5 創作方法

P6 創作過程

P11 おはなしの背景(演出・脚本からの挨拶)

P12 舞台公演写真

P14 ミャークフツ(宮古方言)朗読劇に関する
アンケート調査結果の分析

琉球大学 国際地域創造学部・島嶼地域科学研究所
石原 昌英

P25 「黄金(くがに)文化再発見」朗読劇発表会を観て
～方言(みゃーくふつ)継承について考える～

一般社団法人宮古島市文化協会
会長 饒平名 和枝

P26 「宮古島と演劇」

宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場) 統括
與那覇 俊和

P27 「朗読劇発表会で思うこと」

劇団かなやらび 父母会代表
奥間 郁子

P28 「事業名に込めた思い」

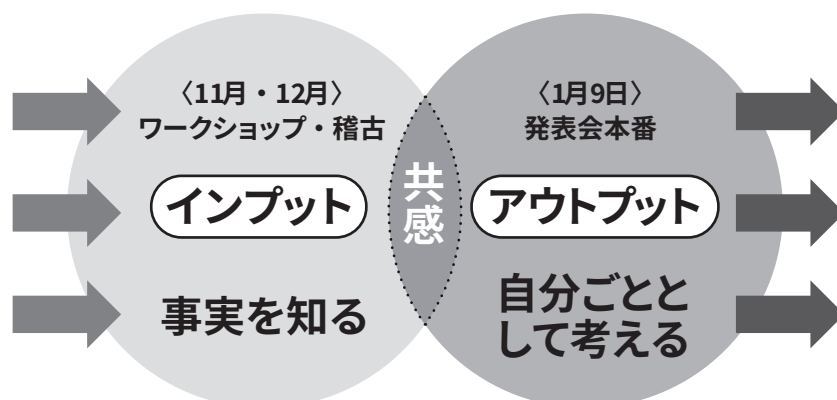
TEAM SPOT JUMBLE
喜舎場 梓



年間スケジュール

	年間予定	変更点
2021年 6月	<p>開催準備(現地打ち合わせ) 宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、FMみやこ等の協力を得ながら、地元の伝統芸能、民謡サークル、方言サークルとどのように協働していけるかを検討。末吉 功治(Team SPOT JUMBLE)が太平洋戦争体験者にインタビューし、脚本を執筆。(5～6月)</p>	<p>新型コロナウイルス感染拡大により渡航自粛要請あり。訪問時期の見直し。 緊急事態宣言 沖縄県 2021年5月23日～9月30日</p>
7月～9月	<p>宮古島の歴史と文化を学ぶワークショップと、沖縄本島・東京のスタッフによる演劇の基礎を学ぶワークショップを開催(7～11月で3回)。</p>	<p>新型コロナウイルス感染拡大により渡航自粛要請あり。訪問時期の見直し。 宮古島市長「来島を控えて」7月9日記者会見</p>
10・11月	<p>ワークショップ開催 研究調査開始。</p>	<p>宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、FMみやこ等の協力を得ながら、地元の芸能団体、方言サークルとどのように協働していけるかを検討。宮古島の戦争体験者の証言を撮影する。(10～11月) 11月出演者応募開始。11月に4日ワークショップを開催。ワークショップの進捗遅れ、研究調査を見送る。</p>
12月	<p>地域住民に出演者・スタッフとして参加してもらいながら、沖縄の歴史・文化にふれる機会を創出する(12月稽古・1月公演)。</p>	<p>稽古と並行して脚本を執筆。ワークショップでの創作をもとに劇作家・演出家が再構成し、演劇作品を発表する(12月稽古4日・1月稽古4日)。 研究調査開始</p>
2022年 1月	<p>公演開催 研究調査(観客へのアンケート、出演者へのインタビュー)</p>	<p>公演開催 1月9日 研究調査(まん延防止等重点措置が発出され、研究調査入れず。観客へのアンケートを実施)</p>
2月	<p>ワークショップ開始から公演終了後まで、琉球大学島嶼地域科学研究所を中心に、参加者や地域住民が公演に参加し鑑賞したことにより創出された社会的価値を調査研究し評価。今後経済的価値にまで高めていく可能性を考察し、報告書にまとめる。</p>	<p>感染拡大防止のため出演者へのインタビューはできなかったが、後日メールなどでヒアリングを実施。観客へのアンケートを元に研究調査し、事業を評価する。</p>

インプットとアウトプットが出来る平和劇



共感し、明日の平和を築く。

事業の趣旨・目的

文化庁「戦略的芸術文化創造推進事業」として、日本劇団協議会正会員であるTEAM SPOT JUMBLEと劇団スーパー・エキセントリック・シアターが市民劇を創作することとなりました。幅広い観客層に鑑賞機会の充実を図り、沖縄の文化・芸能・言葉等にふれる契機とすることで文化芸術の社会的価値を創出することを目的としています。「黄金(くがに)文化再発見」は、世界に誇れる豊かな島、沖縄県の文化を発信していきたいという思いの元、名付けられた事業です。今後も継続的な実施を計画しています。

本年は宮古島の「太平洋戦争」をテーマに朗読劇の発表会を実施します。終戦から76年が経ち、戦争体験者から直接話

を聞くこと、証言の収集をすることが困難になっています。戦争を体験していない世代が、戦争の惨禍をどのように後世に伝えることができるかが今後の課題です。「ピンとこない」「理解したくても理解できない」という特に若者たちに伝わりやすい作品にしたいと考えており、証言の聞き取りから実態を踏まえ、演劇を通して戦争について学ぶ機会を創出します。

また、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、多くの人が大切なものを奪われました。学校生活で学生は体験共有・表現活動の機会が失われています。この朗読劇が消化不良を起こしている人々の「表現の場」になることを目指し、次年度の市民劇に向けて取り組んで参ります。

証言を掘り起こし、市民の皆さんと共に創作する【朗読劇】

2021年
11月

【土日開催 4日間】 20・21日／27・28日 戦争証言ワークショップ
ワークショップ講師：島袋 寛之・与那嶺 圭一・蔵元 利貴・ナツコ 方言サポート：村山 靖
演出：白土 直子 構成・脚本：末吉 功治

2021年
12月

【金土日開催 6日間】 3・4・5日／17・18・19日 稽古

2022年
1月

1月5日～8日 稽古、1月9日 発表会本番
※新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、
県や市の規定範囲内で実施を検討

2022年
2月

2月7日(月)～2月13日(日) 動画配信

講師紹介

ワークショップ講師・演出
01



白土 直子

(しらと・なおこ)

劇団スーパー・エキセントリック・シアター 所属

【主な出演作】

舞台「熱海五郎一座」
新橋演舞場シリーズ
(2022年5月末より公演予定)

NHK「あさいち」
ドラマ「相棒」
Web CM「丸美屋」
など

ワークショップ講師・脚本
02



末吉 功治

(すえよし・こうじ)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演・脚本作品】

「琉神マブヤー」シリーズ
ニライ・龍神ガナシー役
(琉球放送)

てだこ演劇祭「鬼切鬼丸」
脚本・演出・出演
('17.9 浦添市てだこホール 大ホール)
劇団岸野組「好きだってえのに」
出演 (俳優座劇場) など

ワークショップ講師・出演
03



与那嶺 圭一

(よなみね・けいいち)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

「琉神マブヤー」シリーズ
ハブクラゲン役
(琉球放送)

「9人の迷える沖縄人2020」
(主催：おきなわ芸術文化の箱)
など

ワークショップ講師・出演
04



村山 靖

(むらやま・やすし)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

バラエティ「スクール革命」
(日本テレビ)

国立劇場おきなわ企画公演
「琉球講談 片足ピンザ」

ワークショップ講師・出演
05



蔵元 利貴

(くらもと・かずき)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

りっかりっかフェスタ
2019・2020
「酒盗り物語」
「戯曲リーディング2021
in 沖縄「わが星」
(主催：日本劇作家協会 沖縄支部)
など

ワークショップ講師
06



島袋 寛之

(しまぶくろ・ひろゆき)

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

舞台「見えない船」
(佐藤信 演出)
舞台「クテラン人々」
(藤井ごう 演出)
など

ワークショップ講師
07



ナツコ

TEAM SPOT JUMBLE 所属

【主な出演作】

ドラマ「返還交渉人
-いつか、沖縄を取り戻す-」(BS
プレミアム)

「戯曲リーディング2021
in 沖縄「わが星」
(主催：日本劇作家協会 沖縄支部)
など

TEAM SPOT JUMBLE 学校現場での 演劇ワークショップ実績

2011年より、学校現場を中心にワークショップを実施。他、福祉や地域活動、社員研修などの様々なテーマに沿ってプログラムを作り、ニーズに合わせたワークショップを展開中。

▼ワークショップの様子は
YouTubeにてご覧いただけます。



創作する過程を大切にグループ内で話し合う

ドラマ創作 ワークショップ

グループを作り、自分たちで役割や物語、セリフを考え、短いシーンを創作し発表します。シーンを創る過程で異なる意見をすりあわせ、新たなアイデアや建設的な考え方が生まれる瞬間を経験し、コミュニケーションについて考える場を共有します。また、経験を通じた学びは、「自分ごととして考える力」に繋がります。場面を想定し、疑似体験をすることが出来る「演劇」を活用することで、主体的で対話的な深い学びへと導きます。



創作

グループに分かれて、
証言について語り合い演劇創作する。

体験する・考える・発見する・話し合う



STEP
1

アイスブレイク

体を動かしてみよう

STEP
2

テーマ

心に残った証言を共有する

STEP
3

メインコンテンツ

創作

STEP
4

振り返り

フィードバック



11月20日(土)・11月21日(日)

準備 13:00
W S 14:00~16:30
フィードバック 17:00~18:00

コーディネーター／喜舎場 梓
講師／白土 直子・末吉 功治・与那嶺 圭一・
村山 靖・蔵元 利貴・島袋 寛之・ナツコ

場 所 | 未来創造センター スタジオ1

参加人数 | ・小学生3名・中学生 3名
(計19名) | ・高校生1名・大人12名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に優しく伝える方法を考える
- ・演劇WSを体験することで、朗読する時の感情表現に繋げる
- ・宮古島の太平洋戦争について知る
- ・方言に慣れ親しむ

演劇に慣れるゲームからスタート!簡単なじゃんけんや手遊びから始まり、演劇的な表現を体験出来るジェスチャーゲームで楽しみました。



11月20日プログラム

オリエンテーション
・事業主旨説明・講師紹介

アイスブレイク

グループ分け3チーム
・グループでのアイスブレイク

ジェスチャーゲーム
・デモンストレーション・お題は自分たちで考える・作戦会議と練習

発表と講評
見せ方のアドバイスもする

振り返り

役者から戦争の証言を聞く(証言朗読)

11月21日プログラム

オリエンテーション
・昨日やったことを確認

アイスブレイク

戦争の証言文を読んでどういう作品にするかを考えシーンを創る
・参加者に証言文を読んでもらう
・方言も一言以上入れる

発表と講評
証言の共有、方言の共有、当時の状況について教え合う
創作に苦戦したところ・工夫したことを共有する

振り返り

・やってみてどうだったか?・WSに参加する前と後での宮古の戦争に対する考えの変化や感じたことを共有する



11月27日(土)・11月28日(日)

準備 13:00
W S 14:00~16:30
フィードバック 17:00~18:00

コーディネーター／喜舎場 梓
講師／白土 直子・末吉 功治・与那嶺 圭一・
村山 靖・蔵元 利貴・島袋 寛之・ナツコ

場 所 | 未来創造センター スタジオ1

参加人数 | ・小学生3名・中学生3名
(計15名) | ・高校生1名・大人8名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に優しく伝える方法を考える
- ・演劇WSを体験することで、朗読する時の感情表現に繋げる
- ・宮古島の太平洋戦争について知る
- ・方言に慣れ親しむ

宮古島で起きた戦争の証言を読み、ジェスチャーゲームの要領でお芝居作り。証言者の気持ちを考え、創作し、発表して見せ合いました。



11月27日プログラム

オリエンテーション
・今回の内容について

アイスブレイク

新しいグループを作る
・インプロゲーム

戦争の資料を読んでシーン創作する
・「戦前の生活」・「戦争の足音」→方言も一言入れる
・白土より演出を加える ※役名は本人の名前以外で

振り返り
・演出を受けて明日どうするのかを考える
・今日やってみてどうだったか？

役の解除
・戦時中の暗い気持ち、役になりきったまま帰らないようにリラックスさせる

11月28日プログラム

オリエンテーション
・昨日やったことを確認

アイスブレイク

昨日作ったシーンを練り直す
・休んでいたメンバーに説明する ・白土より演出を加える

発表と講評
証言の共有、方言の共有、当時の状況について、末吉から補足する
創作に苦戦したところ・工夫したことを共有する

振り返り
・やってみてどうだったか？ ・WSに参加してみて考えの変化や感じたこと

役の解除
戦時中の暗い気持ち、役になりきったまま帰らないようにリラックスさせる



12月17日(金)・12月18日(土)・12月19日(日)

準備	16:00~17:00 / 12:00~13:00
稽古	17:00~20:00 / 13:00~17:00
フィードバック	20:00~21:00 / 18:00~20:00

コーディネーター／喜舎場 梓
 講師／白土 直子・末吉 功治・与那嶺 圭一・
 村山 靖・蔵元 利貴(音響・照明スタッフ同行)

場 所 | 未来創造センター スタジオ1

参加人数 | ・小学生2名・中学生3名
 (計13名) | ・高校生1名・大人7名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に優しく伝える方法を考える
- ・演劇WSを体験することで、朗読する時の感情表現に繋げる
- ・宮古島の太平洋戦争について知る
- ・方言に慣れ親しむ

いよいよ稽古が本格的に始まりました。創作したシーンを毎回発表し、演出の白土さんからの指摘を受け、更に練り上げていきます。



12月17日プログラム

オリエンテーション

- ・今回の内容について

アイスブレイク

創作したシーンをブラッシュアップする

振り返り

- ・演出を受けて明日どうするのかを考える
- ・今日やってみてどうだったか？

役解除

12月18日プログラム

アイスブレイク

全体の流れを把握する
 (出捌けの整理)

前日の作ったシーンを
 ブラッシュアップする

振り返り

- ・演出を受けて明日どうするのかを考える
- ・今日やってみてどうだったか？

役解除

12月19日プログラム

アイスブレイク

通し稽古

振り返り

- ・今日やってみてどうだったか？

役解除



1月5日(水)・1月6日(木)・1月7日(金)・1月8日(土)

5日(水) 17:00~20:00 稽古(未来創造センター研修室)
 6日(木) スタッフ入り 17:00~20:00 稽古(未来創造センター研修室)
 7日(金) マティダ市民劇場入り 17:00~20:00 稽古
 8日(土) 出演者12時入り 13:00~16:00 場当たり・ゲネプロ

コーディネーター／喜舎場 梓
 講師／白土 直子・末吉 功治・与那嶺 圭一・
 村山 靖・蔵元 利貴(音響・照明スタッフ同行)

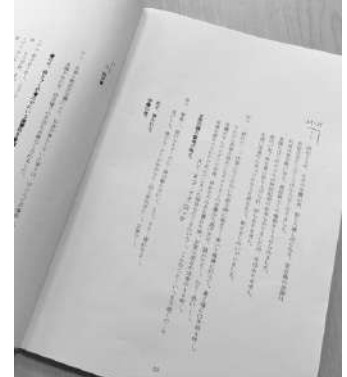
場 所 | 未来創造センター研修室
 マティダ市民劇場

参加人数 | ・小学生2名・中学生3名
 (計13名) | ・高校生1名・大人7名

＼ ねらい /

- ・演劇を楽しみ、相手に優しく伝える方法を考える
- ・演劇WSを体験することで、朗読する時の感情表現に繋げる
- ・宮古島の太平洋戦争について知る
- ・方言に慣れ親しむ

台本を小道具に見立てるなどしながら、創作していきます。みんなで創り上げた朗読劇。どのような発表になるのでしょうか。



1月5日プログラム

オリエンテーション
 ・今回の内容について
 稽古
 役の解除

1月6日プログラム

稽古
 (スタッフ立ち合い)
 役の解除

1月7日プログラム

舞台稽古

1月8日プログラム

舞台稽古
 場当たり・ゲネプロ
 (映像撮影)

おはなしの背景

ここは宮古島。島の至るところにさとうきび畑が広がり、ハイビスカスやブーゲンビリアが咲き、美しい自然と海に囲まれた、言わずと知れた南国の島。風光明媚なこの島に、悲しい出来事が起こったことを、決して忘れてはいけません。学校における軍事教育。地理的に平坦な地形を持つ宮古島に海軍飛行場が計画され、小さな島に約3万人もの軍隊の駐屯が始まりました。女性・子どもも狩り出された飛行場建設作業の重労働。食糧調達も儘ならぬ様になったころ、宮古島の青い空を灰色に染める空襲が始まるのです。

*参考文献：沖縄県史(1974年発刊)
「綾道-戦争遺跡編-」(宮古島市教育委員会発刊)



日時：2022年1月9日(日) 開演：19:00
会場：宮古島市民文化ホール(マティダ市民劇場) 入場者数：89名

ご挨拶



講師・演出
白土 直子

戦争の話は、観るばかりだった。作る側になり、いろいろと戦争のことを知っていくと、そのあまりの悲惨さに、本当に身につまされる。

演じる側も同じで、参加して下さった皆さんもまた、心を重くしながらも、真正面からこの作品に取り組んでくれた。この平和な時代に、感じなくてもいい辛さを、役と一緒に背負って。

その原動力は、「絶対戦争をしてはいけない」という、ただシンプルな想い。

今回、戦争を経験していない16人が、その想いを全身に込めて、大切な方言を使って、戦争を語ります。その姿は、きっと観る方の心を動かさずです。

短い時間ですが、私たちがつくるあの時の宮古島を、一緒に体験して下さい。

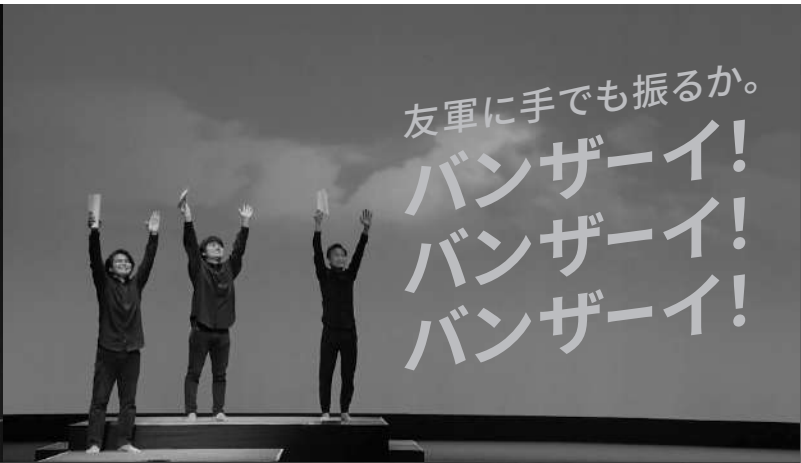


講師・脚本
末吉 功治

新年明けましておめでとうございます。コロナ渦でまだまだ油断できない状況のなかではありますが本日の朗読劇が開演出来ることを嬉しく思います。昨年宮古島の皆様と、宮古島で起こった戦争の物語を作りました。私自身が沖縄本島で生まれ育ち、宮古島での戦争については全く存じ上げておりませんでした。宮古島での戦争を調べれば調べるほど、知れば知るほど胸が苦しくなり、沖縄戦とは違った悲惨さがありました。事実、宮古島戦の資料は少なく、今

回、沖縄県史をもとに創作した作品を書きました。戦争証言を直接聞くことが難しくなっていくこれからの時代。この作品が宮古島の皆様の、2度と起こしてはいけない戦争について、知る、語り継いでゆくきっかけになっていただければ幸いです。

最後に、この作品作りにご助力いただきました、仲宗根将二様、宮古島教育委員会様、宮古島市文化協会様、この作品に関わって下さった皆様方に、心より御礼申し上げます。



死ぬ覚悟じゃなくて…
生き抜く覚悟が
必要なんだよ…。





ご先祖様、どうか、
あの人が無事で
帰って来られるよう、
お守りください……。。



日本め 兵隊や
なうゆが しーゆー
がらや.. (日本の兵隊は何を
しているかね...)

【 ミャークフツ(宮古方言)朗読劇に関する アンケート調査結果の分析 】

石原 昌英

1. はじめに

2022年1月9日に宮古島のマティダ市民劇場においてミャークフツ(宮古方言)朗読劇が上演された。本稿では会場で実施したアンケート調査の結果を分析する。上演当日から宮古島市に「まん延防止等重点措置」が発令されたこともあり、上演に際しては厳重な新型コロナウイルス感染予防対策がとられた。結果として観客は89名であったが、アンケート調査に協力した(アンケートに回答した)者は63名であった。

アンケート調査は、ミャークフツを維持継承していく取組としての朗読劇の効果を調べるための質問からなるパート1(琉球大学島嶼地域科学研究所が実施)と戦争証言の継承と朗読劇に関する質問からなるパート2(公益社団法人日本劇団協議会が実施)から構成された。アンケート用紙の表面でパート1、裏面でパート2の質問をした。質問項目は下記の通りである。

パート1

- 1) 宮古島市の出身ですか。
- 2) 「いいえ」の場合、どちらのご出身ですか。
- 3) 現在宮古島市に住んでいますか。
- 4) 年齢は何歳代ですか。
- 5) ミャークフツのレベルはどの程度ですか。
- 6) どの程度ミャークフツを使用していますか。
- 7) 宮古島市の子ども達にミャークフツを使えるようになってほしいと思いますか。
- 8) 今日のミャークフツ朗読劇の内容をどの程度理解できましたか。
- 9) 今回のような住民が参加するミャークフツ朗読劇の上演はミャークフツの保存継承に効果があると思いますか。
- 10) 質問9の回答の理由は何ですか。

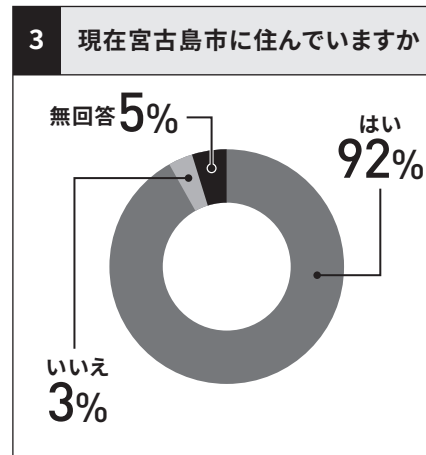
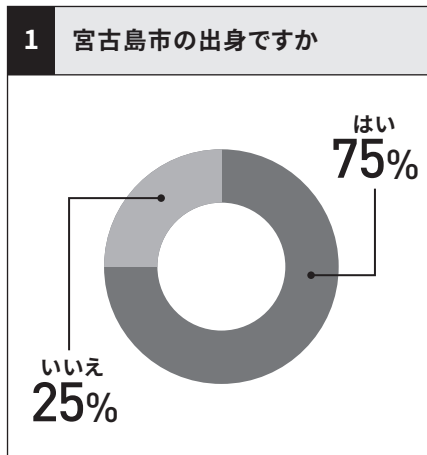
パート2

- 1) 本日の公演は、何でお知りになりましたか。
- 2) 本日の公演チケットは、どちらでお求めになりましたか。
- 3) 宮古島で起こった戦争について、証言を読んだり、聞いたりしたことがありますか。
- 4) 慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか。
- 5) 戦争証言を劇にすることで、平和学習になると思いますか。
- 6) 来年もこのような市民劇を開催する場合、参加してみたいですか。
- 7) 本日の公演の感想をお書き下さい。

なお両パートとも最後の質問は自由記述回答である。
以下にパート1とパート2の回答を分析する。

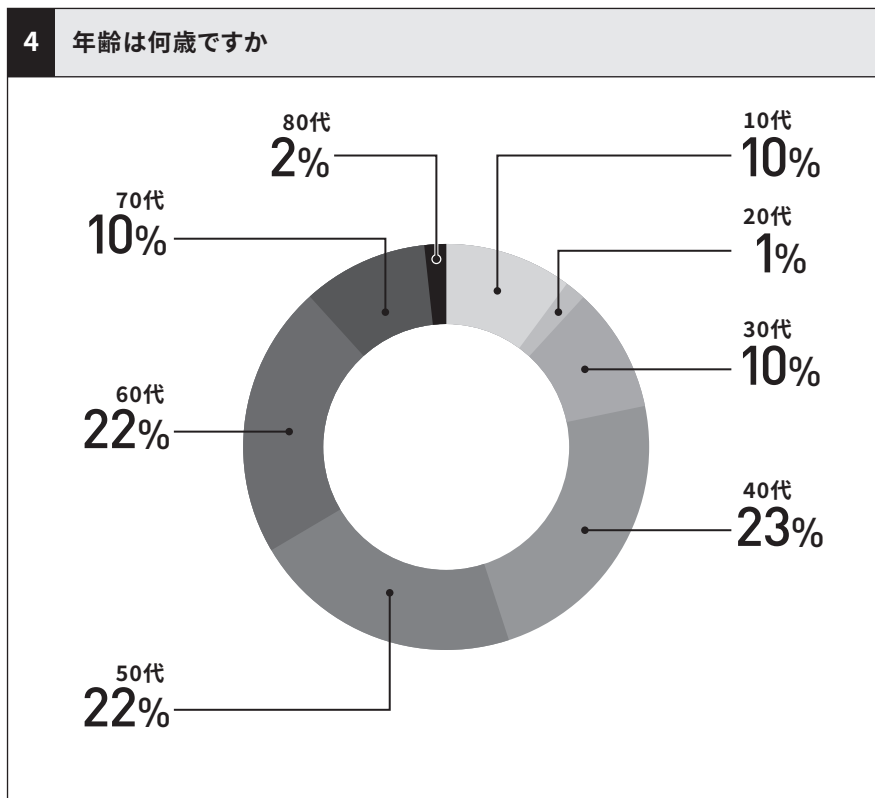
2. パート1の回答の分析

パート1では自由記述も含めて10の質問をした。まず質問1と質問3についてであるが、回答者の75%が宮古島市の出身で、回答者の92%が宮古島市在住である。



宮古島市出身でない者には、沖縄市出身者が1名、県外出身者が7名、韓国出身者が1名いたが、出身地を回答しなかった者も複数いる。また、回答者の92%が宮古島市在住であるので、宮古島出身でない者も現

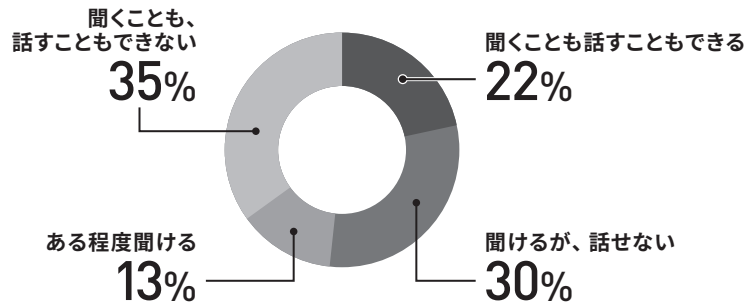
在宮古島市に住んでいる。なお宮古島出身者であるが現在は島外に住んでいる回答者がいた。次に回答者の年齢であるが、10歳代から80歳代以上に渡っているので、様々な年代の観客が朗読劇を観たことがわかる。



次に回答者のマークフツ運用能力である。選択肢は「聞くことも話すこともできる」「聞けるが話せない」「ある程度聞ける」「聞くことも話すこともできない」の四つである。なお、この選択肢は琉球新報社が5年ごとに実施している「沖縄県民意識調査」で使われている選択肢と同じである。「聞けるが話せない」または「ある程度聞ける」と回答した者がいわゆる「潜在的話者」に当てはまる。文法知識を持っていないと、マークフ

ツを聞いて理解することはできないので、潜在的話者はマークフツの文法知識を持っていると言える。何らかの理由があって、話すことができないのであるが、この潜在話者がマークフツを話せるようになり、話すようになると、「聞くことも、話すこともできる」者の数が増加する。言い換えると、この回答をした者がマークフツを発話する機会をいかに設けるのが課題となっていると言える。

5 ミャークフツのレベルはどの程度ですか

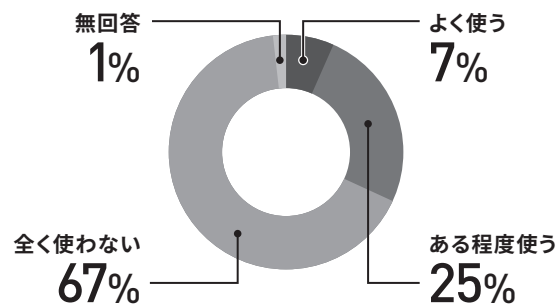


回答が一番多いのはマークフツを「聞くことも、話すこともできない」の35%で、2番目は「聞けるが、話せない」の30%である。35%の回答者には宮古島市の出身ではない者が含まれていると思われるが、宮古島市出身であるがマークフツが飛び交う方言環境で育っていないので、マークフツの文法知識を習得する機会がなかった者が多いと思われる。「聞くことも話すこともできる」と回答した者は22%

で、10名に2名であるので、このデータはマークフツの消滅危機の度合いが高いことを示唆している。一方で、「聞けるが、話せない」または「ある程度聞ける」と回答した者、つまり潜在的話者と言える者が43%いることは、マークフツの再活性化の可能性が残っていることを示している。

次に、日常的な使用頻度について訊いた。その結果を下に示す。

6 どの程度ミャークフツを使用していますか

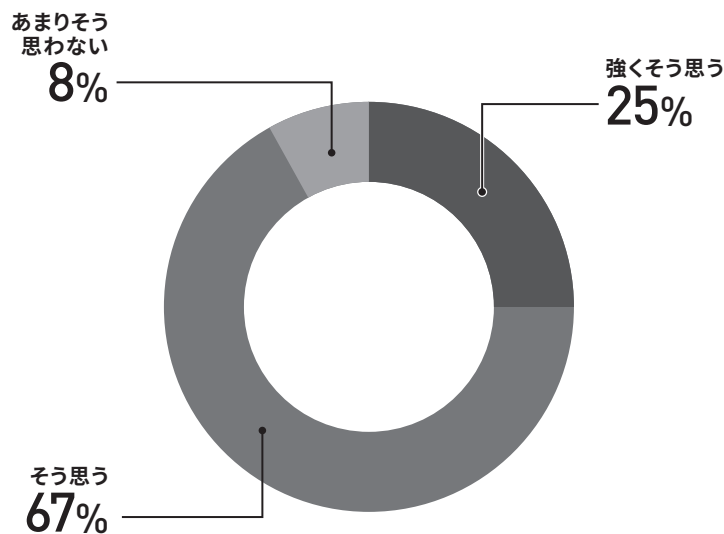


この質問への回答は沖縄県全体的な特徴と合致している。つまり、地域の言語-マークフツ-を使える者でも日常生活でその言語を使う傾向にはないということである。質問5の回答が示すようにマークフツを話すことができる者は回答者の22%であるが、質問6で「よく使う」と回答した者は7%で、「たまに使う」と回答したものが25%である。「全く使わない」と回答したものが67%で割合が最も高い。これは、質問5の回答結果からある程度予想できることである。「よく使う」「ある程度使う」と回答したものは合計で32%であるが、その相手はマークフツを話すことができる者、または聞いて理解できる者であることが想像できる。ここから言えることは日常的な生活の場でマークフツを「聞くことも話すこともできない者」がマークフツに接する機会がないであろうということである。ここに学校教育におけるまたは市民が参加するマークフツ劇の可能性がある。劇は非日常の世界であるが、参加者はマークフツの台詞を声に出したり聞いたりすることにより、マークフツに接する

ことができる。劇に参加する・できる児童生徒や市民の数は限られているが、少しずつマークフツに接する者の数を増やし、結果としてマークフツ話者の数を増やしていくことは可能である。

次に、マークフツの継承に関する質問をした。具体的には「子ども達にマークフツを使えるようになってほしいと思いますか」という質問である。子ども達が使うようになって初めてマークフツは継承されるのである。この質問に25%が「強くそう思う」67%が「そう思う」と回答していて、肯定的な回答の割合は92%である。このことから、回答者のほとんどがマークフツの継承を望んでいることがわかる。しかしながら、質問6への回答と関連づけて見ると、言語継承は望むが、それに向けた行動は取っていないことがわかる。ここに見られる「言語意識と言語行動のギャップ」は沖縄県が実施している「しまくとぅば県民意識調査」が示す状況と一致している。このギャップを如何に縮めていくのかがマークフツの維持継承に向けた課題の一つである。

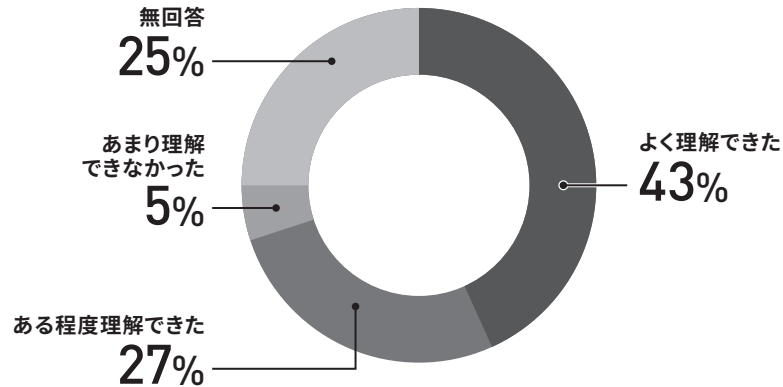
7 子ども達にマークフツを使えるようになってほしいと思いますか



次に、上演されたマークフツ朗読劇の理解度について質問した。「よく理解できた」と回答した者が43%で、ある程度理解できたが27%であったので、観劇者の多くが劇の内容を理解したと言える。あまり理解で

きなかったと回答して者が5%あったが、「全く理解できなかった」と回答した者はいなかった。ただし、無回答の25%の中に「全く理解できなかった」者が含まれる可能性はある。

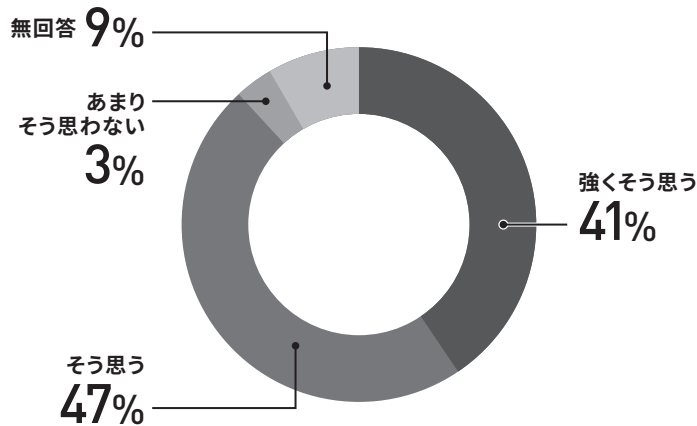
8 今日のマークフツ朗読劇をどの程度理解できましたか



選択肢回答の最後の質問はマークフツ朗読劇の効果に関するものである。質問は「今回のような住民が参加するマークフツ朗読劇の上演はマークフツの保存継承に効果があると思いますか」というものであった。41%が「強くそう思う」、47%が「そう思う」と回答していて、合計で88%なので、アンケート調査

協力者のほぼ90%が、朗読劇の効果について肯定的な回答をしている。台詞にマークフツがふんだんに取り入れられているので、観客はそれを聞くことによって、地元の言語に触れることができる。また、演者は練習を通して、マークフツを学習することが可能である。特に演者は自分の台詞と他の登場

9 今回のような住民が参加するマークフツ朗読劇の上演はマークフツの保存継承に効果があると思いますか



人物の台詞を覚える必要があるのか、かなり効果があると思われる。

質問10は質問9の回答の理由を自由記述で回答するものであった。以下に回答のあった自由記述を示す。なお、明らかにパート2

の質問に対する回答であると判断される複数の回答をパート2の自由記述回答に追加した。また、最後の回答はパート2のものであるが、ミヤークフツ朗読劇の効果に関するものなのでパート1に移動した。

自由記述回答

- ・(60代)宮古方言普及に役立ててほしい
- ・(40代)子供たちがふれ合う機会が劇という楽しいものならなじめそう。
- ・(50代)絶滅危惧種の方言、宝です。多くの年齢層や若者、子供達に出演してもらいたい。再演を希望いたします。
- ・(9歳)学校の授業で気になっていっぱい調べて新聞を作って今習っている。
- ・(60代)自分が話せない分、子供達の話せるようになったらいいことだと思う。
(自分達が子供のころ、方言を言ったら罰が与えられました。
学校卒業と同時に本土に行き方言を言う機会がなくなった為)
- ・(10代)方言があまり分からなかった。もっと続けてほしい!!
- ・(50代)方言を見直す機会となると思います。すばらしい朗読劇でした。
- ・(10代)知識として。
- ・(30代)興味はもてると思うけど方言の意味の理解はむずかしそう。
- ・(50代)ジェスチャーもまじえてだったのでわかりやすい。
- ・(60代)地元の言葉には力があり効果があると思う。
今回の方言をきいて少しでも興味を持ってくれたらいいですね。
皆さんの熱演に感激しました。ありがとうございました。
- ・(40代)こんな機会がなければミヤークフツにふれることも学ぶこともなくなる気がします。
- ・(70代)日常でほとんど使わないから。
- ・(30代)歴史を通じてミヤークフツに触れる機会があるから。
- ・(50代)若人→年配の方まで出演できよかったです。
方言を多く使っていくといいかもしれないです。
方言を多く使うことによって子供たちが方言に馴染んでいくのかもしれない。
方言大会よりも多くの方々に普及していくのではないかと思います。
再演を希望いたします。

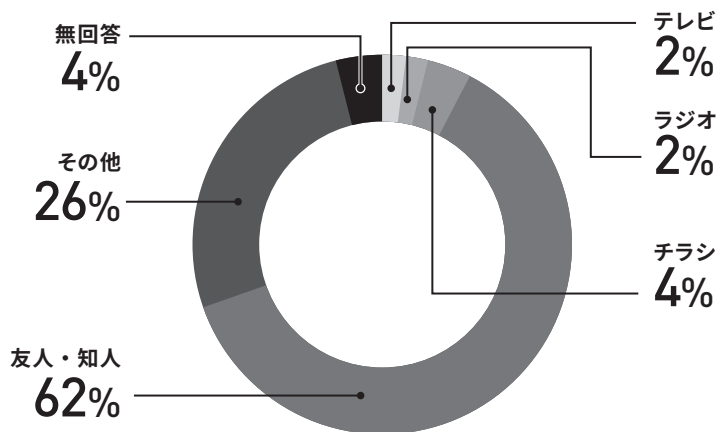
自由記述の回答数は多くはないが、「このような朗読劇を通して、ミヤークフツに触れることにより、地元のことば(ミヤークフツ)を学ぶ人が増えてほしい」とまとめることが出来そうである。日常生活でミヤークフツを話したり、聞いたりする機会があまりなく、このような機会でないとなようなチャンスがないということが、自由記述から想像することができる。中には次のような主旨の記述もある。「自分が

子どもの頃は共通語励行運動が実施されていてミヤークフツを使うと罰せられた。自分は学校卒業と同時に県外に出たので方言を使う機会がなくなってしまった。」この回答者は長い間ミヤークフツを使っていなかったため、「聞けるが、話せない」という言語能力になっている可能性がある。もし、聞く能力が残っているなら、劇に参加することで、話す能力を取り戻してほしいものである。

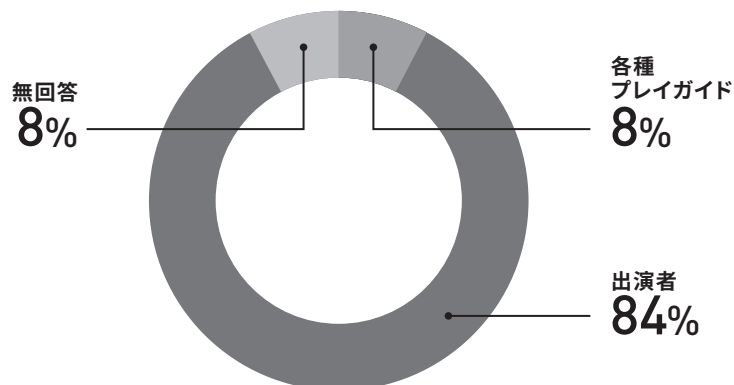
3. パート2の分析

パート2では戦争の記憶の継承や平和学習に関する質問を中心として調査した。最初の2問は上演された朗読劇に関する情報とチケットの入手方法に関する質問である。

1 本日の公演は何でお知りになりましたか



2 本日の公演のチケットはどちらでお求めになりましたか



今回の公演については、コロナ禍の状況であったので、スケジュールの変更等がありマスコミ等での宣伝ができなかったようである。そのため、情報は友人・知人から入手し、チケットは出演者から購入した観客がほとんどである。宮古島市には宮古

テレビ、FMみやこ、宮古新報、宮古毎日という地域に根ざしたローカルのマスコミがあるので、次年度は、コロナ禍の影響もなくスケジュールが固定され、マスコミ等を通じた宣伝ができるようになることを期待したい。

次の二つの質問は宮古島市における「戦争」に関するものである。質問3は「宮古島で起こった戦争について、証言を読んだり、聞いたりしたことがありますか」で、太平洋戦争の沖縄戦に関して宮古島市で起こった「戦争」について知っているかどうか訊いている。58%が「はい」と回答し、42%が「いいえ」と回答している。宮古島市において「証

言を読んだり、聞いたりしたことがある」者の数が、10年前より減少していれば、島民・市民の戦争体験が風化していることになるので、この質問との関連で、資料を調べなどして「全体像」を把握する必要がありそうである。「戦争体験の風化」が進行しているのであれば、今回のような劇を上演することの意義が深まる。

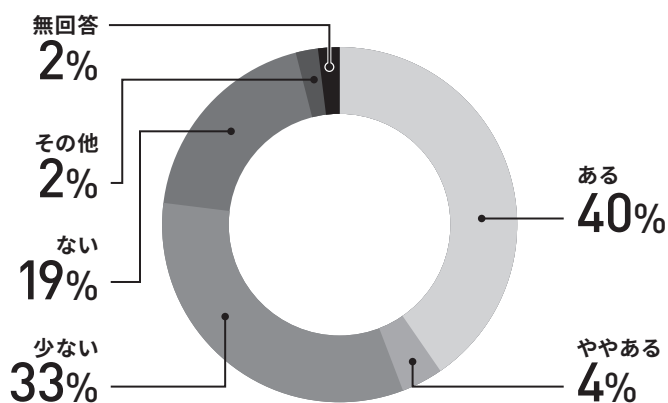
3 宮古島で起こった戦争について、証言を読んだり、聞いたりしたことがありますか



質問4は「慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか」というものである。40%が「ある」、4%が「ややある」、33%が「少ない」、19%が「ない」と回答している。「ない」「その他」「無回答」を除く77%の回答者が平和学習で地元

(宮古島市)で起こった戦争について学ぶ機会があると答えている。観客の年齢層を勘案すると、自分が生徒の頃にそのような機会があった、または自分の子どもにそのような機会があるということに基づいて回答したと思われる。

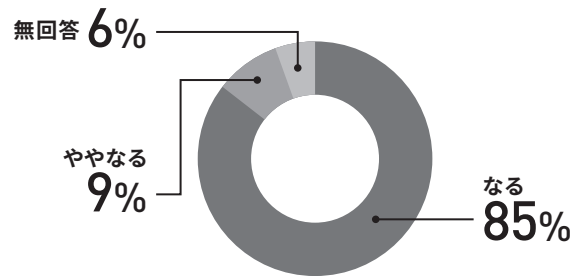
4 慰霊の日などの平和学習で、地元で起こった戦争について学ぶ機会がありますか



質問5は「戦争証言を演劇にすることで、平和学習になると思いますか」という質問である。85%が「なる」、9%が「ややなる」と回答している。このふたつの回答の合計

で94%なので、ほぼ全員が演劇を通して戦争について学ぶことは、平和学習になると思うと回答したことになる。

5 戦争証言を演劇にすることで、平和学習になると思いますか

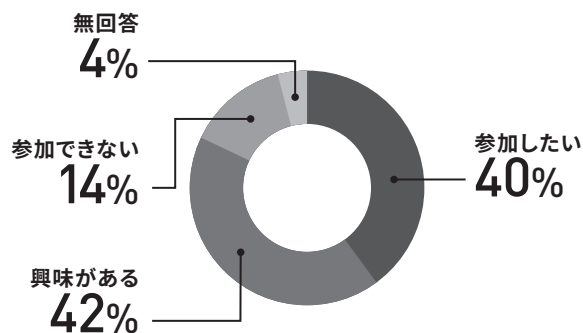


演劇は、戦争を「疑似体験」できるので、証言を聞くことよりは効果が高いと思われる。また、演者として参加することは、その場の「追体験」ができるので、戦争の恐怖・意味のなさを「実体験」として学ぶことができるだろう。「ひめゆり平和資料館」や「沖縄平和祈念資料館」などで書かれた証言や映像を見ることは大切な経験となるが、それは主として沖縄島で起こったことである。宮古島で起こった「戦争」については、書かれたり、語られたりした証言や遺品で学ぶしかなかったであろう。劇には場面、声(台詞)、所作や効果音が入ってくるので、「戦争」の疑似体験がよりリアリティの高いものになると予想でき

るので、効果の高い平和学習となると思われる。質問5に肯定的な回答をした観客はリアリティを感じたのであろう。

選択肢回答の最後の質問は「来年もこのような市民劇を開催する場合、参加してみたいですか」というものである。ここで言う「参加」は演者として参加することである。40%が「参加したい」42%が「興味がある」と肯定的な回答をしている(なお、14%が「参加できない」と回答している)。自由記述にあるように、「死」に直面するというかなり刺激的な場面もあったにも関わらず、参加に前向きな回答が多かったということは、それだけ朗読劇の効果があったということの証左であろう。

6 来年もこのような市民劇を開催する場合、参加してみたいですか



最後の質問7は、「本日の公演の感想をお書き下さい」と自由記述回答を求めたものである。多くの回答があった。下にその回答を列挙する。なお、内容から判断して、パート1に移したものの、パート1から移してきたものがある。記述内容から、観客が宮古島での「戦争」について学び、舞台上の動作を伴う朗読劇を通じた「疑似体験」に感動したことがわかる。

自由記述回答

- (20代)大人になってから平和学習の機会がなかったので改めて学ぶ良い機会となった。涙を流した。
- (60代)とても良かった。
- (40代)方言がよく使われていてリアリティがあったので良かった。みなさんすごいです!!
- (60代)1人1人に感動しました。食べるものがなく芋の根っこを掘って食べたていたと聞いたことがあります。
- (9歳)難しかったけど戦争をよく知る良い機会になった。
- (40代)今まで聞いたことがなかったことや知らなかったことが多く、勉強になりました。皆さんの演技も素晴らしかったです。
- (10代)とても良かったです。感動しました(泣)戦争がとてもすごい怖い・悲しいということが改めて分かりました。お母さんが亡くなったときに叫び声がとても胸が苦しかったです。コロナが無ければもっと見れたのに...と思いました。自分の立ち場が主人公だと考えると怖かったです。とても良かったです。
- (60代)最後がきつい。これが現実。だから今宮古島はすすんで。ミサイル配備ついに米軍も配備化発表、つい2日前。弾薬庫に法律違反、住民保護計画は全て不備。この劇のような事態がおこってしまう!!
- (30代)すごく良かったです。感動して泣いてしまいました。コロナがなければもっともたくさんの方に見ていただきたい。特に戦争を知らない子供たちには平和学習で見てもらうのが良いと思う。苦しい戦争の中で生き延びてくれた祖父母には心より感謝します。少ない練習期間とは思えない。みなさんとても上手でした!!とても良い時間になりました。ありがとうございました。
- (未記入)宮古島の戦争については食糧難とマラリアに苦労したという事は聞いてました。今平和な時に生きていて先祖の戦争による悲しみを忘れてこの頃、改めて気付く事が出来ました。平和である事の幸せを子や孫へと繋いで行く事の大切さをとても感じる事が出来ました。ありがとうございます。
- (40代)もう少し早い時期だったら、もっと多くの人に観てもらえたのに残念と思う。
- (10代)おもしろかったです。
- (10代)迫力があってすごかったです。勉強になりました。
- (30代)悲しい内容でしたが知れて良かったです。ありがとうございました!
- (50代)うちな一口が所々あったので多少気になりました。
- (30代)初めて朗読劇を見ましたがとても感動しました。
- (50代)コロナの中で、聞き取りワークショップ等→練習→上演まで大変だったと思います。大変お疲れ様でした。地元の子供達、大人の方々と共に創り上げることは未来への種まきだと思います。ありがとうございました!
- (60代)よかった。

- ・(40代)とても分かりやすくおもしろかったです。
- ・(50代)戦争の持つ怖さがよく伝わってすばらしかった。改めて考える機会となった。
- ・(40代)台本が命尽きた時、芋や桑やスコップ、小道具になり、赤い紙が血となり工夫されてよかったです。かなやらびメンバーも良い演技。心に響きました。久々の観劇、心の栄養になりました。ありがとうございました。
- ・(70代)みなさんの熱演に感動しました。
- ・(70代)とてもよい劇でした。出演者の皆さまごろうさま。
- ・(40代)市の教育の日に上演を!全小中学校へDVD配布を!!お願いしたいです!
- ・(未記入)悲しいお話でした。
- ・(未記入)こんなことがあったのかと思った。
- ・(80代以上)戦後のこと思い出してとてもよかったです。
- ・(30代)みなさんの演技がすばらしかったです!
- ・(60代)宮古の戦争は飢餓地獄と言われています。戦争は全てが失われることを子どもたちが熱演して感動しました。短い期間によく練習してすばらしいと思います。
- ・(30代)沖縄戦について学ぶ機会も少なくなっていると思うので、このような機会があると良いと思う。
- ・(40代)とても良かった。
- ・(40代)とても分かりやすくおもしろかった。
- ・(50代)実際にあった話からのお芝居なので感動したしよく理解できた。保存してほしい。

4. おわりに

調査者は、上演前に朗読劇の練習を観察した。まだ台本は完成してなくて、台詞にはミャークフツは含まれていなかった。上演当日前から宮古島市での新型コロナ感染者の数が増加し、1月9日に宮古島市が蔓延防止等重点措置の対象となり、市長からは非公式ながら来島自粛要請が出されることになっていた。そのような状況であったので、調査者は当日の上演を観察することはでき

なかった。しかし、アンケート用紙の自由記述回答を読むと今回の朗読劇が観客に大きな感動を与えてことがわかる。また、ミャークフツの台詞も日頃接することのない地元のことばに接する機会を与えたようである。まん延防止等重点措置の為、集客に限りがあったが、朗読劇が平和学習及びミャークフツ継承について考える機会となったことは明らかである。

「黄金(くがに)文化再発見」朗読劇発表会を観て ～方言(みゃーくふつ)継承について考える～

(一社)宮古島市文化協会
会長 饒平名 和枝

KAZUE NOHINA

去る1月9日(日)、宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)にて「黄金(くがに)文化再発見」朗読劇を鑑賞した。TEAM SPOT JUMBLE と劇団スーパー・エキセントリック・シアターが「宮古島の太平洋戦争」をテーマに創作した「私の、そして、あなたの(せんそう)物語」をキャッチコピーとした市民劇である。

戦後76年が経過し、戦争を経験していない世代が多くなっていく中で、証言を基に出演者たちがワークショップをし、ディスカッションを重ねながら方言創作劇を完成させたことは大変素晴らしく意義深いことだと思う。

劇では、戦争の全体像が時系列で紹介され、飢餓や病気で苦しむ人々の姿が印象深く描かれていた。中でも、日本兵の前で住民が方言で会話する場面、マラリアで命を落とした母親を「あんな!あんなー!(お母さん!)」と泣き叫ぶ娘の声など、方言で語られる場面はとてもリアルで心揺さぶられた。

公募により集まった市民や「劇団ぴん座」の団員、「劇団かなやらび」計13名の皆さんの熱演に改めて拍手を送りたい。

宮古島にも確かに戦争があったこと、二度と戦争の悲劇を起こしてはならないことを多くの方が心に止めたに違いない。

今回の朗読劇に方言を取り入れたことは、その土地の歴史や文化を発信する上で効果的だったと思う。方言に

はその土地を語ることとしての温かさや音声言語としての豊かさが感じられるからである。

宮古においては、本協会主催の方言大会(平成6年より開催)やHPにて「みゃーくふつで昔話・わらべ歌」の公開、市民総合文化祭(児童生徒の部)の「郷土の民話お話大会」や中文連主催の「方言お話パフォーマンス大会」が毎年開催されるなど、方言の持つ豊かな世界や妙味に触れ方言継承について共に考える機会としている。

以前、私が勤務した中学校の「教育の日」の取組では、地域の「コーラス(ゆりの会)」の皆さんが戦後の暮らしの様子を民謡の音楽劇で創作し発表。また、小中学校合同で地域の方の方言指導のもと「平和劇」に取り組むなど、地域に根ざした言語(方言)・文化を教育活動に取り入れた継承活動も行われている。

現在、消滅の危機にある方言(文化)を後世に遺すためには、学校や地域社会はもとより、今回の朗読劇のように、多くの人々が協働で様々な取り組みを創出し、発展させることが重要なのではないだろうか。

観劇後、若い世代には方言を通して郷土愛を育み、未来の平和に向けて託されたものをしっかりと繋いでもらいたいと願った。

今回、TEAM SPOT JUMBLEを中心とした劇団の皆さんが、宮古島の戦争にスポットを当て「方言朗読劇」として創作・上演して下さったことに心から感謝申し上げます。

宮古島と演劇

宮古島市文化ホール(マティダ市民劇場)統括

與那覇 俊和

TOSHIKAZU YONAHA

1996年5月、宮古島の文化の殿堂としてマティダ市民劇場が誕生しました。

それまで旧市民会館や公民館などで行われてきた様々な催し物が、その年からこの`殿堂、へと向かうこととなりますが、開館翌年の1997年、劇団を立ち上げたいという一部の市民の声を受け、マティダ市民劇場自主公演のための劇団「まていだ児童劇団」が誕生します。

以後、県内外から様々な団体が公演をし、同劇団も年一回の公演を重ねていきますが、市民の目も肥えてきたであろう数年後、華やかに誕生したまていだ児童劇団がその活動を終えることとなります。

しかしその中心にいた子たち自ら小さな演劇集団を立ち上げ、そしてそれが宮古島のいくつかの中学校へと派生していく形になったのです。

2010年頃、中学校演劇からその次を目指していた学生たちを中心に、再び劇団を創りたいという気運が高まり、現在の「劇団かなやらび」の前身である「宮古島市こども劇団」が誕生しました。

この劇団を続けていくにあたり、今までにない試みとして、月に一、二度東京から講師を招き、芝居の`心、を稽古のなかで丁寧に伝えていくやり方で演劇を作り上げていきました。

そして数度の公演で自信をつけたこどもたちは念願の

東京公演(座・高円寺)を果たし、劇団かなやらびは現在も活動を続けています。

2015年、それに触発された島の演劇愛好家らが、次は大人の劇団を立ち上げたいと奮起し、宮古島演劇集団「劇団ぴん座」を誕生させました。

劇団ぴん座は、島で唯一の大人の劇団として活動し、宮古方言を取り入れながら癒しと笑いを与えることを目指している劇団で、広く市民に知られています。

初年度は県の補助事業を活用し、2年目以降は市の補助金をいただきながら年1回の公演を現在も続けています。

この25年、いくつかの劇団の立ち上げや市民劇などに携わってきたなかで、熱しやすく冷めやすいということはありませんが、演劇というのはまさに情熱的な宮古人気質にあっていたように思います。

どう続けていくか、学校や仕事の合間に稽古をすること、演劇を続ける意義をどう伝えどう維持していくのかは、やはり今後も難しい課題です。

宮古島は祈りの島であり、今も数々の神事が存在します。古来より、先祖に感謝を捧げてきた島人の`心、が舞台へと繋がり、それらが島中に伝播するとき、今後も望まれた形で劇団は存続して行けるのだらうと思います。

朗読劇発表会で思うこと

劇団かなやらび 父母会代表

奥間 郁子

IKUKO OKUMA

4月から、宮古島市子供劇団は「劇団かなやらび」になります。高校三年生のリーダーが多数決の結果発表をしました。6年前の事です。

2012年に宮古島市主催の文化事業ワークショップの演劇をとおして他者とのかわり方で自己を客観視、自己表現、潜在能力の発見をしてみよう!!と集まった小学4年生～高校3年生の劇団は発足から3年後には、保護者が運営活動する「劇団かなやらび」と名称を変更しました。子ども達自ら名付けたのが宮古方言の「かなやらび(愛(かな)すう童(やらび))」です。

子供劇団発足から宮古方言を交えたオリジナル脚本で年1回の公演を実施しています。宮古方言は中舌母音が多く文字を小さくしたり表記に工夫しているようですが、方言の台詞には指導者も子ども達も苦労が絶えません。方言の台詞を子ども達に口移して伝えたりすると、「んん、？」意味不明な言葉になり、ネイティブな宮古方言の台詞は本当に難しいです。

また、公演の演目には、宮古ならではの素材が入っており、宮古島の文化的歴史探究で子ども達とガー(ガマ・洞窟)を見学した事があります。鬱蒼と茂った雑草をよけ、石段を20段ほど降りていったガーは、蒸し暑く虫がたくさんいました。ちょうど、6月の「慰霊の日」を過ぎた頃だった為、小学生の団員はテレビで見た戦争をイメージして怖がり、中学生は宮古島にもこんなところがあったんだね!と、ガーの石段を駆け上がって、明るい地上に出たときは高校生の団員と宮古島の先人の過酷な日々を想像し演劇に活かしていこうと話した事を思い出します。

今回、～黄金(くがに)文化再発見～の朗読劇発表会に劇団かなやらびの団員が参加させていただける事になり、具体的な宮古島の戦争体験を聞く機会がありました。

宮古島の人口は、約55,000人、高齢の島とはいえ、約45,000人が戦後生まれです。「うちは、級長だったから、校長室で兵隊さんにお茶を出して、一緒にお菓子をたべていたさあ。でも、友達は、毎日、石ころをバークで運んで道をつくらされていたよお。」

「連合軍の宮古上陸はなかったけれど、今はロック・フェスティバルをするトゥリバーにも兵隊の秘密の壕があったよ。」

「兵隊も食べるものがないから、飼っていた、うちの牛の太ももの肉を切り取って盗んでいったよ、…」

「マラリアという病気で毎日人が死んでいくのが怖かった。」

話を聞いた戦争体験者たちは、年齢的に小学生だった頃の話で、学校で見る視覚教材とは違い、同じ年代の子ども達が体験した証言は、生々しくもありテレビの中の話のような印象だったようです。

沖縄本島の悲惨で残酷な地上戦がクローズアップされ宮古島の語り部のようなものはここ20年ほどの事で、40～50代の世代は、宮古島の戦争体験の話あまり聞いてこなかったように思います。年月の経過で戦争体験者の高齢化は進み身近な平和教材の素材である記憶の継承も急務であると感じました。

宮古方言が絶滅言語といわれて久しいが、50代の私自身、日常語として宮古方言を話すことは無い。と、言うべきか話せません。聞いて100%理解できているという自信もありません。他地域からの編入者も多く、60代の大人といえども宮古方言を流暢に話している人はあまりいません。

両親が宮古出身の子どもである高校生の娘が宮古方言を話すことは勿論、聞くことも出来ないと思った時は衝撃をうけました。二世帯住宅に祖父母と住んでいるから、方言を聞くことは出来ているだろうと漠然と思い込んでいたのです。

この戦争体験を高齢者の方たちは、全て方言で話した方はおらず、方言交じりのみゃ～く言葉で話されていました。

「演劇をとおして間接的体験活動をしてきた子供は自尊感情や外向性、精神的な回復力が高い。」この言葉のとおりであるならば、方言劇でこの島で生まれ育った誇りを後世に、みやこブルーに輝くこの海と、あららがま魂を、この劇団かなやらびの子ども達も伝えて行けるのかもしれない。

課題は山積だが、悲観ばかりでは無いと強く感じた”朗読劇”でした。

事業名に込めた思い

TEAM SPOT JUMBLE

喜舎場 梓

AZUSA KISHABA

沖縄には、古くから伝承される諺があり、先人の知恵や営みから生まれた言葉が多くあります。言葉遊びのようなその教えは、黄金のように価値があるということから「黄金言葉(くがにくとぅば)」と呼ばれています。豊かな自然と、その恵みに感謝し暮らしてきた人々。歌や芸能を愛し、工芸などの多くの文化を持つ宮古島。宮古島が持つ文化資材(黄金)を地元の人々と共に掘り起こし、発信したい。その思いを事業名に込めました。

沖縄では方言離れが深刻化しており、私も話すことができません。琉球大学の石原先生に研究調査頂いたように、宮古島も様々な取り組みが為されるものの、若年層が生活の中で方言に触れる機会を得られずにいます。また、戦争証言を直接聞くことが出来なくなりつつある今、今後どのように語り継ぐことが出来るかが、戦後に生まれた私たちの課題です。特に宮古島は地上戦がなく、慰霊の日などで平和学習する時も、沖縄本島の戦争を学ぶことが多いとのことでした。しかし宮古島は、約3万人もの軍隊が駐屯し、島ごと軍事要塞化が進められた特殊な島でもあります。飛行場建設の重労働に民間人が駆り出され、食糧が手に入らず、栄養失調やマラリアで多くの人が亡くなりました。宮古島で起きた戦争の証言を聞き取り、資料から実態を踏まえ、演劇を通して戦争と方言について学ぶ機会を創出することが、この朗読劇の目標となりました。

新型コロナウイルスの感染流行によって出鼻は挫かれたものの、宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、

マティダ市民劇場の協力を得て、出演者が集まりました。参加者の中に方言の継承活動をされている方がいらっしゃったことから、参加者同士で教え合い、脚本を宮古方言(ミャークフツ)に翻訳するなど、主体的な学びの場が生まれました。そして何よりも、参加していた中学生が「平和だから今は関係ないと思ってたけど、私たちが語継がなきゃ」と感想を語ってくれた時に、この為に企画を立ち上げたのだと実感しました。参加者の一人が、自身の曾祖母から「兵隊の起床ラッパに替え歌した」というエピソードを聞き出し、作品に加えることもありました。もっと知りたいという思いから、学びが多く生まれ、一つの舞台に集約する。そのエネルギーは舞台上から客席へと伝わり、終演後、大きな拍手に包まれました。

黄金言葉の一つに「まくとぅーそーけー(誠の事をしていれば)、なんくるないさ(なんとかなるさ)」という言葉があります。「なんくるないさ」は全国的に知られるようになった言葉ですが、本来は「まくとぅーそーけー」とワンセットです。沖縄の人は楽観的に生きるだけでなく「芯を持ち、やるべきことを成せば、なんとかなるものである」という教えの元に生き抜いてきました。先人はその言葉通り、大和世を、戦世を、アメリカ世を乗り越えてきたのです。過去に向き合い、地域に向き合い、まっすぐに作品を作り続けることこそ、このコロナ世を乗り越えて表現する術ではないかと、黄金言葉を改めて噛み締めています。



文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

文化庁委託事業
令和3年度戦略的芸術文化創造推進事業
「黄金(くがに)文化再発見」

2022年3月

発行：公益社団法人日本劇団協議会
〒160-0023

東京都新宿区西新宿6-12-30 芸能花伝舎3F

TEL:03-5909-4600

FAX:03-5909-4666

編集：喜舎場 梓